■：書評

『イタリアの文化と日本　日本におけるイタリア学の歴史』

ジョヴァンニ・デサンティス／土肥秀行編、原基晶・霜田洋祐・國司航祐・森田学他著

アダム・タカハシ

特に明治期以降、イタリア文化は日本社会においてどのように受容され、またそれが日本文化の形成の点でいかなる役割を果たしてきたのか。この『イタリア文化と日本』は、それらの問いに対して、イタリア文化の本邦における受容を歴史的かつ分野横断的に分析することで応えようとする画期的な論集である。この論集は、全体が大きく三部「文学」「思想」「芸術」に分かれている。本書評では、紙幅の関係上、特に第一部と第二部の内容を中心に紹介し、その後にこの論集の意義について簡単に振りかえることにしたい。

第一部「文学」は四章から構成されている。第一章「ダンテからルネサンスまで」（原基晶）は、この論集が有する意義を早々と告げ知らせる論考である。原は「文学の輸出と輸入＝受容の関係」における「支配と被支配のヘゲモニー的環境」の影響を強調する。文化の受容に際しては、イタリアと日本のあいだ、あるいは日本内部においても様々な力の勾配が前提となっている。そういった条件を無視して文化の受容を語ることは端的に不可能なのだ。そのことは原自身が専門とするダンテの場合にまさに顕著である。ダンテの『神曲』は、現在では世界文学の古典として不動の位置を占めているように見えるが、そのような役割を託されるようになったのはイタリア本国においても国民国家創設以降の話でしかない。日本における『神曲』の受容でも、富国強兵や脱亜入欧といったイデオロギーを背景として、近代日本の「精神的な支柱」を探究する目的のために読まれることが多かった。結果として、ダンテのキリスト者としての側面は軽視された。そのような宗教性の軽視は、ボッカッチョによる『デカメロン』の受容でも同様であった。非キリスト教的な普遍的人間像なるものが、中世の作品のうちにも期待されたのである。

第二章「啓蒙主義とロマン派」（霜田洋祐）では、十八世紀と十九世紀の思想家や文学者の中から、ベッカリーア、マンゾーニ、そしてレオパルディが取り上げられる。「刑法学のバイブル」とも称されたベッカリーアの『犯罪と刑罰』を受容した法学者の風早八十二にとって、その作品は「封建的刑罰制度に対する批判」として捉えられた。ベッカリーアの孫であるマンゾーニの主著『婚約者』は、戦後邦訳されたとき、カトリックの信仰と結びつけられて紹介された。レオパルディは散文作品の方が先に受容され、その読者のなかには夏目漱石や芥川龍之介もいた。他方で彼の詩の包括的な研究が行われるようになったのは実に近年のことである。特筆すべき成果として、2022年に刊行された古田耕史による単著『ジャコモ・レオパルディ ロマン主義自然観と〈無限〉の詩学』がある。

第三章「ファシズム期と戦後」（菊池正和）は、二十世紀文学の受容を論じている。二十世紀前半においてダンヌンツィオの作品が上田敏によって先駆的に紹介された。だが、1920年代になると早くもこの詩人は十九世紀的な過去の作家として扱われるようになった。ただし、戦後新たに三島由紀夫によって注目された。戦後の文学にかんしては、特にネオレアリズモの受

容、および「カルヴィーノの衝撃」が語られる。カルヴィーノの没年に出版された雑誌『ユリイカ』の特集では、河島英昭がネオレアリズモとの関係から論じ、また同特集で高橋源一郎はカルヴィーノのメタ・フィクション性を「野っ原に置かれた映画のセット」と評した。

第四章「女性の言葉による世界」(山崎彩)は、ナタリア・ギンズブルク、エルサ・モランテ、そしてダーチャ・マライーニを取り上げている。ギンズブルクの紹介は須賀敦子の功績によるところが大きい。須賀にとってギンズブルクは単なる翻訳対象ではなく、彼女自身の文体の形成の点でも決定的な意味を持っていた。二十世紀を代表するもう一人の女性作家モランテの紹介でも、須賀の存在は無視できない。彼女の編集者であった木村由美子がその翻訳を後押ししたからである。また、フェミニズムを意識した作家マライーニの作品の受容については、望月紀子による翻訳が論じられている。

第二部「思想」は三章から成る。第五章「中世から初期人文主義まで」(星野倫)では、中世思想の主に京都およびその周辺での受容が論じられる。アッシジのフランチェスコと下村寅太郎との繋がり、日本における西洋中世哲学研究の基礎を形作った山田晶を中心としたトマス・アクィナス『神学大全』の全訳事業、また『饗宴』と『帝政論』を中心とした「哲学者」としてのダンテの受容と関連して、民間の立場でイタリア学を支援した大賀寿吉の存在が語られる。

第六章「ルネサンスと近世」(フランチェスコ・カンパニョーラ)では、西田や田辺といった京都学派の哲学者たちのもとで学んだ後、『思想』の編集者をつとめた林達夫の『文藝復興』がまず取り上げられる。昭和の超国家主義的思潮への批判が林にとっても前提となっていたが、歴史や神話への向き合い方の点で林とアウエルバッハやカッシーラーとの共通性も指摘される。他には、日本の政治行政への批判からマキャヴェリに傾倒した大岩誠(多賀義彦)、国民の自己決定を重視し『日本よ国家たれ』を刊行することで論争を生んだ清水幾太郎におけるヴィーコ受容が論じられる。

第七章「新観念論から現代思想まで」(國司航佑)では、二十世紀のイタリア思想、特にクローチェ、ジェンティーレ、そしてグラムシとその受容が論じられる。二十世紀初頭のイタリア哲学を代表するクローチェとその主著『美学』は、1910年代以降、夏目漱石やその門下生を中心に読まれ、彼の「芸術は表現である」という命題も好んで引用された。なかでも芥川は主に英訳を通してであるが親しんでいたようだ。また、クローチェの『歴史叙述の理論と歴史』は羽仁五郎によって紹介された。羽仁はドイツ留学中にクローチェの著作を知り、『クロォチェ』という著作も執筆するに至る。同時代にクローチェと双璧を成していたジェンティーレは、ムッソリーニ政権の中で活動したこともあり、クローチェと比べイタリア国外での影響力は小さかった。ただし、日本においては三浦逸雄がその紹介の役割を果たした。さらに、特に60年代以降注意を向けられることになったのがグラムシである。元々共産党員であった石堂清倫は、社会変革の運動のなかで彼に関心を寄せ、『グラムシ選集』の刊行でも中心的な役割を果たした。石堂の影響下で、日本は多くのグラムシ研究者を輩出することになった。イタリア思想の近年の紹介者として、上村忠男や岡田温司の活躍があげられる。ただし、二十世紀の代表的な哲学者であったエマヌエーレ・セヴェリーノの著作が全く紹介されていない点も合わせて指摘されている。

最終の第三部「芸術」は、「美術」(石井元章)、「音楽」(森田学)、「映画」(石田聖子)、「演劇」(高田和文)の四章からなる。すでに述べたように、紙幅の都合上、ここでは石田による「映画」の章のみを紹介したい。というのも二十世

紀においてイタリア映画、特にその「ネオレアリズモ」は映画の領域を超えて、石田が述べるように「政治・社会面から生活や精神面に至るまで、じつに多方面に刺激を与えた」からだ。リュミエール兄弟が開発した「シネマトグラフ」を日本に最初に紹介したのはイタリア人であった。それに関与していた吉澤商店は、その後映画制作会社日活を創設するに至る。戦後のいわゆる「ネオレアリズモ」の作品群、中でもロッセリーニの作品「無防備都市」や「戦火のかなた」はイタリアの現実の新たな描写をとおして、世界中に衝撃を与えた。日本人監督のなかでは、ローマに留学していた増村保造、また近年では是枝裕和もロッセリーニ作品への愛好を語っている。

第三部については部分的にしか紹介できなかったが、ここまで論集全体を概観してきた。最後に本論集の意義を改めて考えることで、本書評を閉じることにしたい。イタリアは近代に一つの国民国家へとまとまる前から、歴史的に豊かな文化を形成してきた。そのように少なくとも千年以上にわたって蓄積されてきた文化の総体を、日本は明治期以降に一挙に受けとめたのである。かの国の中世以来の思潮が、近代日本の言説空間のなかへと突如到来したのだ。イタリアの豊かな伝統は日本文化の形成の点でも大きく寄与した一方で、国民国家としての日本の行く末を案じる本邦の知識人たちは良くも悪くも自分たちの目的に合致するようにその異国の文化を選択的に利用してきたという面もあった。原基晶が第一章の末尾で記すとおり、日本におけるイタリア文化の翻訳や受容とは幾つもの力関係や思惑が重なり合う〈文化闘争〉でもあったことが、この論集からは浮かびあがってくる。だが、そのような事態は、私たちにとってもはや過ぎ去った昔の出来事なのではない。歴史を語るという営み自体が常にその折々の時代状況と切り離せないならば、受容当初に見過ごされてきた論点をいま付け足せばより適切な理解が得られるというものでもないのだ。西欧と日本の文化の関係自体が大きく変化しつつある現代にあって、いったい私たちはイタリア文化の何を新たに見出し、何を継承し、そして過去の受容の局面で生じたいかなる歪みを修正していくべきなのかという問い直しが、これからも必要となるだろう。その点で、この記念碑的な論集は、近代日本におけるイタリア文化受容をめぐる一つの決算書であると同時に、来たるべき問い直しの基礎となる一つの出発点でもあると表現できるだろう。

（松籟社、2023年）